



VICTORINOX

COMPANION FOR LIFE

ニュースリリース
2014 年 10 月 1 日
ビクトリノックス・ジャパン株式会社

ビクトリノックス、「道具の日(10 月 9 日)」に先立ち、 日本初となる日本・スイス「道具、ナイフ教育」意識・実態調査結果を発表

ナイフで鉛筆を削れる子ども、日本は 20%、スイスは 53.4%と 2.6 倍以上の開き
6 歳までにナイフを与える親、スイスは 38.8%、日本は 1.9%

スイスの伝統的ナイフメーカー、Victorinox の日本法人であるビクトリノックス・ジャパン株式会社(東京都港区／代表取締役:田中麻美子)は、「道具の日(10 月 9 日)」に先立ち、日本・スイス国交樹立 150 周年を記念して実施した国内初の「道具、ナイフ教育」に関する両国の意識・実態調査結果を本日発表しました。

本調査より、「道具、ナイフ教育」に関する親の意識や子どもの道具・ナイフ利用の実態に関して、主に以下のような傾向が認められました。

日本

- 日本の親は、子どもが手先を使う道具で創造性や生活技術の向上、手先の器用さを養うことに関心を示している。55.2%の親が、子どもが 12 歳になるまでにナイフの使い方を教えることが良いと考える傾向がある。また、子どもがナイフで小さな怪我をする経験が教育上必要であるという意見をスイス以上に支持している。
- 一方、ナイフは危険で日常的に使わない、子どもが持つべきものではない道具として捉え、26.7%の親が何歳でも教える必要がないと思っている。
- また、ナイフで鉛筆を削ることができる子どもは 20.0%であり、自分が子どもの頃と同等かそれ以上に、子どもがナイフを器用に使うと思う親は、日本では 7.7%に留まっている。

スイス

- スイスの親は、子どもが手先を使う道具で責任感を育むことを最も重視しており、6 歳以下の子どもにもナイフを与える傾向があることから、親が子どもにナイフを贈るという習慣が今も根付いていることが伺える。
- スイスの親は道具を与える際に、子どもの精神的発達や能力習得を期待する傾向が見受けられる。子どもと一緒に親が道具を使って工作を行う機会を日本よりも多く設けており、幼少期から家庭生活や家族交流の中でナイフの使い方を教育する傾向が伺える。また、日本と比べ、スイスの子どもはアナログ、デジタルを問わず多様な道具を使う傾向にあると言える。



VICTORINOX

COMPANION FOR LIFE

日本・スイス「道具、ナイフ教育」に関する意義・実態調査の主な結果

* 詳細については、4 ページ以降の【参考資料】を参照

- ナイフで鉛筆を削ることができる子ども、日本は 20.0%、スイスは 53.4%
- 6 歳までにナイフを与える親、日本は 1.9 %、スイスは 38.8%
- 子どもにナイフの使い方を教えることができない親、日本は 30.5%、スイスは 2.9%
- 自分が子どもの頃と同等、それ以上に、子どもがナイフを器用に使うと思う親、日本では 7.6%、スイスでは 67.0%
- 子どもが使う道具、日本ははさみ、カッターナイフ、スイスはスマートフォンが首位
- 親が子どもに道具を与える際に重視することについて、日本は創造性を育む、スイスは責任感を育むこと
- 子どもと一緒に道具を使って工作を行う頻度、日本は月 1 回以下、全くないが 8 割以上
- ナイフに対するイメージ、日本は危険で日常的に使わない道具、スイスは便利で日常的に子どもも使う道具
- 教育上、子どもにナイフを使わせることについて、日本は 27.6%が賛成、スイスは 80.6%が賛成
- 子どもがナイフで小さな怪我をする経験、スイスよりも日本の親の方が教育上必要と評価

調査の概要

調査対象:	日本、スイス国内に住む 6 歳～15 歳(日本の小学生以上)の子どもを持つ親
有効回答数:	208 サンプル／日本 105 人(男性 43 人、女性 62 人)、スイス 103 人(男性 51 人、女性 52 人)
調査方法:	インターネットリサーチ
調査地域:	日本、スイス全国
調査期間:	日本＝2014 年 9 月 3 日から 5 日／スイス＝9 月 16 日から 21 日
調査目的:	日本・スイスの親の道具・ナイフ教育の意識や子どもの道具・ナイフ利用の実態の把握

*小数点第 2 位を四捨五入しているため、0.1%程度の誤差を含んでいます。

*文中のナイフは、「ポケットナイフ(小刀)、多機能ナイフ」を意味します。カッターナイフは、本来紙や布などの薄い対象物を切るナイフですので、含めておりません。



VICTORINOX

COMPANION FOR LIFE

谷田貝公昭 目白大学名誉教授のコメント

今回の調査結果を受け、30 年以上子どもの指・手腕の巧緻や生活習慣を研究している保育、教育学者の谷田貝公昭氏(やたがい まさあき:目白学園目白大学名誉教授)は、次のように述べています。

「日本の子どもは、ナイフをはじめとするアナログな道具で手先を使う機会や、家庭内で正しい使い方の手ほどきを受ける機会がスイスより少ないことが分かりました。現代の日本の子どもたちが、インターネットやテレビなどの知識や情報収集を介して感覚的に学び取る機会(間接体験)が増加している一方で、遊びや生活の中で自分の身体を通して生活技術を養う機会(直接体験)が減少していることが認められます。」

「また、日本の親の安全教育観として、子どもを危険から遠ざける傾向にあることが伺えます。安全教育には、積極的安全教育(子どもを危険なものに敢えて挑戦させ、日常的なものに変える)と、消極的安全教育(子どもから危険なものを遠ざけ、安全を確保する)という2つの考え方があります。

歴史的には積極的安全教育が社会の発展を促してきたと考えられますが、本調査で親のナイフに対するイメージで危険が最多であることや、ナイフを与えていない親が多いことを踏まえると、現代の日本では、消極的安全教育が優位になっていると考えられます。」

「30 年ほど前に私は『ナイフで鉛筆を削れない子ども』の存在を調査で明らかにし、子どもの手先の巧緻性が低下していることを発表しました。道具は手の延長上であり、人間の脳を刺激し、創造性を育む大切な道具の一つが刃物であり、ナイフであると考えられます。こうした視点からも、ナイフをはじめ様々な道具を使って、直接体験や積極的安全教育の機会を増大させていくことが大切です。

不器用な子どもの存在の裏に、不器用な親の存在があることを社会全体で再認識し、親子で道具やナイフを使いこなすための知識と経験を養う機会をより多く設ける必要があると言えます。」と結んでいます。

ビクトリノックス・ジャパンの CSR 活動方針

ビクトリノックス・ジャパンでは、ナイフを販売する企業の社会的責任として、2010 年頃より正しい刃物の使い方の啓発活動を続けています。基本的なナイフの使い方を学び、細かい手作業の楽しさや自分の手で何かを作る達成感を体験してもらう機会を提供すべく、これまでに、親子の工作ワークショップや「教育と刃物」と題した勉強会などを全国的に開催してきました。

近年は、子ども向けに「脳育工作キット」を発売し、自宅でも手軽に工作キットを手にして、体験できる環境づくりをお手伝いしています。ビクトリノックス・ジャパンは、基本的なナイフの使い方を学び、実際に道具として活用する機会を提供し、刃物類に対する正しい知識と安全な使用方法を普及させ、子どもたちの健全な成長に寄与していく方針です。



VICTORINOX

COMPANION FOR LIFE

■ビクトリノックスについて

1884 年、ビクトリノックスはスイス・イーバツハで創業し、2014 年に 130 周年を迎えました。

創業以来、マルチツールで培った伝統を守りつつ、ライフスタイルをトータルに提案するブランドへと発展を遂げています。日本法人であるビクトリノックス・ジャパン株式会社は、1993 年 1 月に設立されました。

本プレスリリースや取材のお問い合わせ先

ビクトリノックス・ジャパン株式会社

広報担当：御厨(ミクリヤ)、西野

Tel: 03-3796-0951 press@victorinox.co.jp

株式会社 井之上パブリックリレーションズ

ビクトリノックス・ジャパン広報担当：横田、今井、尾上

東京都新宿区四谷 4-34 新宿御苑前アネックス 2 階

Tel: 03-5269-2301 Fax: 03-5269-2305 victorinox@inoue-pr.com





VICTORINOX

COMPANION FOR LIFE

【参考資料】

調査結果の詳細

子どもが手先を使う道具、日本ははさみ、カッターナイフ、スイスはスマートフォンが首位

- 上位 3 位の道具が、日本では、はさみ、カッターナイフ (60%)、スマートフォン、タブレット (44.8%)、特になし (19.0%)、スイスではスマートフォン (73.8%)、はさみ、カッターナイフ ((52.4%))、紐、ロープ (46.6%) の順でした。
- 主な道具別で比べると、ナイフ (日本: 0%、スイス: 35.9%)、包丁 (キッチンナイフ) (日本: 14.3 %、スイス: 33.0%)、ライター、マッチ (日本: 1.9%、スイス: 16.5 %)、裁縫道具 (日本: 10.5 %、スイス: 22.3 %) 紐、ロープ (日本: 13.3 %、スイス: 46.6%) 大工道具 (金槌、ペンチ、ドライバー、のこぎりなど) (日本: 3.8 %、スイス: 29.1 %) でした。
- 日本は全体的に道具の選択数が少ないのに対し、スイスは回答数が多く、子どもが様々な道具を使っていることが伺えます。

親が子どもに道具を与える際に重視すること、日本は創造性を育む、スイスは責任感を育むこと

- 日本では創造性、手先の器用さ、生活技術の向上を育むこと、スイスでは責任感、創造性、子どもの手先の器用さを育むことが上位 3 位の回答でした。
- その他回答率で上位に上がったのは、日本では、子どもの知性を育む、子どもの自立心を育む、特に何も考えていない、親子や家族内の交流を増やすきっかけとなることで、いずれも 20%を越えました。一方、スイスでは、子どもの生活技術を向上させるかどうか、子どもの知性を育むかどうか、子どもの自立心を育むかどうか、アウトドアで役立つ能力が身に付くかどうか 40%を越えました。
- 全体的にスイスは回答率の高い選択肢が多くありました。「特に何も考えていない」が日本では 23.8%に対し、スイスでは 1.9%と回答しており、スイスの親は道具を与えることにより、教育的意義を見出し、子どもの精神的発達や能力習得を期待する傾向が見受けられます。

子どもと一緒に道具を使って工作を行う頻度、日本は月 1 回以下、全くないが 8 割以上

- 日本は月 1 回以下 (44.8%)、全くない (37.1%)、月 2 回程度 (8.6%)、スイスは、月 1 回以下 (35.9%)、月 2 回程度 (13.6%)、月 4 回程度 (13.6%) が上位 3 位の回答でした。
- 月 2 回以上では、日本は 18.1%、スイスは 62.1%でした。スイスと比べると、日本の親は子どもと一緒に道具を使って工作を行う機会を積極的に設けていないことが見受けられます。

ナイフに対するイメージ、日本は危険で日常的に使わない道具、スイスは、便利で日常的に大人も子どもも使う道具として捉える傾向

- 上位 3 位の回答は、日本では危険な道具 (51.4%)、日常生活であまり使わない道具 (41.9%)、大人が持つ道具 (33.3%)、スイスでは便利な道具 (66.0 %)、大人も子どもも持つ道具 (46.6 %) 日常生活でよく使う道具 (35.0 %) でした。
- スイスで上位に上がっている選択肢で比べると、日本は便利な道具 (31.4%)、大人も子どもも持つ道具 (3.8%) 日常生活でよく使う道具 (4.8%) となっています。日本の親がナイフを危険で非日常的な道具として捉える傾向がある一方で、スイスの親は、便利で日常生活で大人も子どもも使う道具として捉える傾向が見受けられました。



VICTORINOX

COMPANION FOR LIFE

教育上、子どもにナイフを使わせることについて、日本は 27.6%が賛成、スイスは 80.6%が賛成

- 賛成が日本は 27.6%、反対が 40.0%、考えたことがないので分からないが日本は 32.4%、スイスは、賛成が 80.6%、反対が 15.5 %、考えたことがないので分からないが 3.9%でした。
- スイスと比べると、日本の親はナイフを子どもに持たせることに慎重な意見を持っていることが伺えます。一方で、考えたことがないので分からないが賛成よりも多く、道具としてナイフを子どもに使わせるべきか、考える機会自体が少ないという実態が見受けられました。

子どものナイフの用途、日本は一切使わない(58.1%)、スイスはアウトドア(69.9%)が最多

- 日本では、一切使わない(58.1%)が最多で、10%を越えたのは、工作(25.7%)、アウトドア(20%)、鉛筆削り(13.3%)でした。スイスでは、アウトドア(69.9%)が最多で、10%を越えたのは、工作(39.8%)、携帯食(果物やチーズ、缶詰など)の皮むき、取り分け、封切(38.8%)、鉛筆削り(26.2%)、習慣として携帯(12.6%)、一切使わない(12.6%)でした。
- スイスの子どもはナイフを使って手先を使う機会が多いことが伺える一方で、日本では子どもたちがナイフを使う機会が少ないことが見受けられました。

ナイフで鉛筆を削ることができる子ども、日本は 20.0%、スイスは 53.4%

- 日本は子どもがナイフで鉛筆を削ることができるかと答えた親は 20.0%、できないと答えた親が 80.0%でした。スイスは、削ることができるが 53.4%、できないが 46.6%でした。
- ナイフで鉛筆を削ることができる子どもの割合が、日本とスイスで 2.6 倍以上の開きがあることから、スイスと比べ、日本ではナイフで鉛筆を削ることができない、あるいはしたことがない、子どもが多いことが見受けられます。
- スイスの子供のナイフの用途で、鉛筆削りは 26.2%でしたが、ナイフで鉛筆を削ることができるという回答が 53.4%だったことより、普段から鉛筆を削らない子どもでも、削る技術を身に付けていることが分かりました。

ナイフを与えられた年齢、親子で比較すると日本は高年齢化、スイスは低年齢化

- 6 歳までにナイフを与えられた親が、日本は 5.7%、スイスは 12.6%、12 歳まででは、日本は 32.3%、スイスは 70.0%でした。
- 子どもと比べると、日本の親はより低い年齢でナイフを与えられた割合が高いのに対し、スイスの親はその逆の結果が出ました。日本では、子どもにナイフを与える年齢が高年齢化し、スイスでは低年齢化している傾向が見受けられます。



VICTORINOX

COMPANION FOR LIFE

図表①: あなたがナイフを与えられたのは何歳ごろですか。

		日本		スイス	
単一回答		N	%	N	%
1	5歳未満	1	1.0	4	3.9
2	5歳ごろ	1	1.0	5	4.9
3	6歳ごろ	4	3.8	4	3.9
4	7歳ごろ	6	5.7	9	8.7
5	8歳ごろ	2	1.9	15	14.6
6	9歳ごろ	4	3.8	4	3.9
7	10歳ごろ	10	9.5	24	23.3
8	11歳ごろ	0	0.0	1	1.0
9	12歳ごろ	6	5.7	6	5.8
10	13歳ごろ	3	2.9	3	2.9
11	14歳ごろ	0	0.0	5	4.9
12	15歳ごろ	1	1.0	1	1.0
13	16歳以上	3	2.9	5	4.9
14	与えられていない	64	61.0	17	16.5
全体		105	100.0	103	100.0

6歳までにナイフの使い方を教えた方が良いと考える親、日本は3.9%、スイスは38.8%、12歳までだと、日本は55.2%、スイスは85.4%

- 日本では、何歳でもナイフの使い方を教える必要はないと思う親が最多(26.7%)でしたが、10歳(21.0%)、12歳(14.3%)ごろに使い方を教えた方が良いと考える親が多いことも分かりました。
- スイスでは、子どもが5歳～7歳ごろにナイフの使い方を教えた方が良いと考えている親が最も多く(47.6%)、81.6%の親が10歳ごろまでに教えた方が良いと考えていることが分かりました。

図表②: 子どもにナイフの使い方を教える年齢は何歳ごろが良いと思いますか。

		日本		スイス	
単一回答		N	%	N	%
1	5歳未満	0	0.0	6	5.8
2	5歳ごろ	1	1.0	15	14.6
3	6歳ごろ	3	2.9	19	18.4
4	7歳ごろ	5	4.8	15	14.6
5	8歳ごろ	7	6.7	12	11.7
6	9歳ごろ	3	2.9	4	3.9
7	10歳ごろ	22	21.0	13	12.6
8	11歳ごろ	2	1.9	4	3.9
9	12歳ごろ	15	14.3	0	0.0
10	13歳ごろ	6	5.7	3	2.9
11	14歳ごろ	2	1.9	1	1.0
12	15歳ごろ	4	3.8	2	1.9
13	16歳以上	7	6.7	2	1.9
14	何歳でも教える必要はないと思う	28	26.7	7	6.8
全体		105	100.0	103	100.0



VICTORINOX

COMPANION FOR LIFE

自分が子どもの頃または、それ以上に、子どもがナイフを器用に使うと思う親、日本では 7.6%、スイスでは 67.0%

- 子どものナイフの使い方について、自分が子どもの頃よりも扱いに慣れていると思う親が、日本では 2.0 %、スイスでは 30.1%。あまり変わらないが、日本では 5.7%、スイスでは 36.9%。慣れていないが日本では 28.6%、スイスでは 20.4%。分からないが、日本では 63.8%、スイスでは 12.6%でした。
- 親の認識として、日本では子どもがナイフに使い慣れていない傾向がうかがわれる一方で、スイスでは、子どもの手先の器用さが維持、向上されていると考えられます。

家庭内で父親がナイフの使い方を子どもに教えた経験、日本は 15.2%、スイスは 68.0%

- 子どもがナイフの使い方を誰から習ったかという設問(複数回答)に対し、日本では、子どもがナイフを使わないので分からない(56.2%)という回答が最多で、父親(15.2%)、(学校の授業で)先生(13.3%)が上位 3 位でした。家庭内の教え手については、母親(8.6%)、祖父(1.0%)、祖母(1.0%)、兄弟姉妹(0%)という結果でした。スイスでは、父親(68.0%)、母親(33.0%)、祖父(13.6%)、(学校の授業で)先生(13.6%)が上位 3 位に挙げられ、家庭内の教え手については、祖母(7.8%)、兄弟姉妹(10.7%)という結果でした。
- 日本と比べ、スイスでは家庭内でのナイフ教育を重視しており、教え手になりえる存在が多いことが見受けられます。

子どもにナイフの使い方を教えることができない親、日本は 30.5%、スイスは 2.9%

- 子どもにナイフの使い方を教えられる親は、日本では 69.5%、スイスでは 97.1%でしたが、その内、自信を持って教えられると答えた割合は、日本で 21.0%、スイスで 81.6%でした。
- スイスと比べ、日本の親がナイフの扱いに自信がないことが見受けられます。

子どもがナイフで小さな怪我をする経験、スイスよりも日本の親の方が賛同的と評価

- 子どもがナイフで小さな怪我をする経験は教育上必要だと考える親が、日本(賛成:58.1%、反対 41.9%)、スイス(賛成:53.4%、反対:46.6%)ともに多いことが明らかになりました。全体的に、スイスよりも日本の親の方が賛同的な傾向が見受けられます。

図③:「子どもがナイフの使い方を誤って、小さな怪我をする経験は子どもの教育上大切である」という考え方についてどう思いますか。



VICTORINOX

COMPANION FOR LIFE

		日本		スイス	
		N	%	N	%
1	賛成	61	58.1	55	53.4
2	反対	44	41.9	48	46.6
	全体	105	100.0	103	100.0
	複数回答	N	%	N	%
1	ナイフで小さな怪我をする経験は、ナイフが扱い方によっては危険な道具であることを理解する上で大切だと考えるので、賛成	44	41.9	31	30.1
2	ナイフで小さな怪我をする経験は、子どもの危険予知能力を高める上で大切なので必要と考えるので、賛成	28	26.7	28	27.2
3	子どものうちにナイフで小さな怪我をする経験は、子どもの手先の器用さを高める上で大切と考えるので、賛成	17	16.2	16	15.5
4	子どものうちにナイフで小さな怪我をする経験は、子どもの他者への思いやりの気持ちを育む上で大切と感じるので、賛成	14	13.3	11	10.7
5	子どものうちにナイフで小さな怪我をする経験は、子どものサバイバル能力やたくましさを育む上で大切と考えるので、賛成	6	5.7	3	2.9
6	その他の理由で必要と考えるので、賛成(具体的に)[]	0	0.0	1	1.0
7	子どもが傷つくことはできるだけ避けるべきだと考えるので、反対	10	9.5	11	10.7
8	子どもがトラウマを持つ可能性があると考えるので、反対	12	11.4	3	2.9
9	小さな怪我をする経験が何か学習効果があるとは思わないので、反対	8	7.6	13	12.6
10	小さな怪我をする経験が特に必要だとは思えないので、反対	10	9.5	18	17.5
11	小さな怪我をする経験は必要だが、ナイフである必要性はないので、反対	26	24.8	17	16.5
12	その他の理由で必要でないと考えるので、反対(具体的に)[]	1	1.0	3	2.9
	全体	105	100.0	103	100.0